

学校教育目標		ふるさと十津川を愛し、ふるさとでの学びを活かして、新しい時代を築く、心豊かな生徒の育成				総合評価(A~D)							
目指す生徒像		自主ー自ら進んで学び、考えて行動できる生徒(確かな学力) 協働ー勤労と責任を重んじ、礼儀正しく協力できる生徒(豊かな人間性) 剛健ー自他の生命を尊重し、明るく元気でたくましく心身を鍛える生徒(健やかな体)				B							
令和元年度の成果と課題		本年度の重点目標				具体的方策							
授業研究を積極的に行い、分かりやすい授業を追求した。学力向上に向け、学習支援ソフトを導入した。学習意欲の向上と家庭学習の充実に向け、更なる手立てが必要である。道徳の教科化に当たり研修を深め、全教職員で授業に臨んだ。総合学習ではブース形式で発表を行い、生徒の表現力向上に繋げた。一人一人の生徒に寄り添う生徒指導と教育相談に取り組んだ。		・基礎、基本の定着を図り、学習習慣の確立を目指す。				生徒の実態を把握し、学習が遅れがちな生徒への対策を図り、実態に応じた指導を行う。							
		・生徒の、主体的な活動を重視し、積極的に行動できる生徒を育成する。				生徒会活動が、より自発的・自治的な活動になるよう、全教員で支援する。							
		・郷土を愛し、未来を担う生徒を育成する。				郷土学習を教育活動に位置付け、生徒が自尊感情を高め、自己実現を目指す活動となるようにする。							
		・自己の将来に対する目的意識を育成する。				勤労の尊さを理解させるとともに、自らの力で進路を選択していく生徒を育成する。							
		・心のふれあいを大切にし、人権意識の向上を目指す。				道徳の時間を中心として、全教育活動を通して人権意識を高め、人権を尊重する実践力をもたせる。							
		・生徒が、心身ともに健康な学校生活を送れるようにする。				食に関する教育の充実を図るとともに、生徒が「健康」について意識を高めることをめざす。							
		・保護者や地域、村内各校所、関係諸機関との連携をより深める。				家庭や地域社会との関わりを多くもつとともに、職場体験、小中連絡会、中高連携活動を充実させる。							
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策	評価指標	中間期(9月)		年度末(2月)							
				自己評価(A~D)	進捗状況	自己評価結果(A~D)	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策				
学習指導等	教科教育の充実	授業時間を十分確保する。	総授業時数に対する進捗率を適宜把握し不足分を補えるよう機動的に時間割を配当する。	B	休校分も夏休みの短縮などで授業時間をほぼ取り戻すことができた。	A	A B B B	休校で不足した授業数はテレビ授業や夏期休暇の短縮で十分に取戻せ、昨年より確保されており、授業内容の進捗も十分である。	学習に対して意欲のない生徒に学習支援ソフトのライブラリなどを使って少しでも関心を持たせ、家庭においても学習する習慣を付けさせていく。	○学習指導等 ・授業時数の確保について、新型コロナウイルス禍の為に長期休校となったが、テレビ授業や短縮夏期休業で昨年以上に確保されたことは評価できる。 ・保護者に学校生活の様子を紙媒体等で伝達していることに努力を感じる。保護者は案外学校の様子を知らないものだけに、周知と理解を不断に続けることは肝要である。 ・自主的な家庭学習の習慣化は、家庭との密接な意思疎通を図りながら進めていかなければならないが、難解な永遠の課題である。 ・タブレットの有効な活用は現代教育の必要事項であるが、ノートに鉛筆で書くという基本的なことを疎かにすると、基礎知識の定着には結びつきにくい。「釈迦に説法」かと思うが、原初的な指導を大切にしたい。			
		生徒・保護者が教科の学習内容や評価を理解できるようにする。	学習状況や評価の仕方を懇談や通知票などで分かりやすく伝える。	C	今年度前半は家庭訪問や授業参観・学級懇談など保護者と対面して伝える機会がなくなったが、後半からは通知表やテストの個票など紙での伝達だけでなく懇談の機会なども有効に活用する予定。	B							
	学習意欲の向上と家庭学習の定着	すべての生徒が分かりやすい授業を行う。	新学習指導要領の移行に伴い、教材や授業内容の研究を積極的に行う。	B	教科ごとにICT機器を積極的に使うなど工夫を凝らしている。	B					B	各担当がICT機器を使おうとし、新しく導入されたタブレットの利用に向けても教材研究に熱心に取り組んでいる。	課題が未提出の生徒には放課後に取り組みせたりしているが、なかなか改善の兆しが見えない。
		家庭学習の習慣化につながる課題(宿題)を設定する。	教科担任と学級担任の連携を深め、生徒一人一人の適正を考慮して課題を設定し、達成度も追跡する。	C	提出期限を守れなかったり、課題が未提出の生徒が各学年とも複数人いる。	C							
	個に応じた学力・体力の向上	学力アップの時間等、放課後学習を有意義な時間に作る。	生徒一人一人に自分の目標を持たせ、学習に取り組ませる。	B	小学校の算数の復習プリントだけでなく、取り組む内容に幅を持たせたが、積極的にeライブラリの教材を使って自分に合った問題を解く生徒が増えた。	B					B	どの生徒も自分の能力や興味にあった課題に積極的に取り組み、教え合うような姿が各所に見られ、自分たちで時間を有意義に使える生徒も増えた。	全校生徒が運動部に所属しているため、一定の体力を保持したり、運動への意欲が高い。休校もあつたが与えられた授業時数で体育大会も行うことができた。
		体育の授業や体育的行事等を通して、基礎体力の向上と生涯にわたり運動に親しむ力を育てる。	生徒の興味や関心を高め、運動に意欲的に参加する姿勢を育てる。	A	特に学校再開時には体力が低下していることを踏まえ、なじみのある曲を用いてダンスを行うことで体力の向上を図った。	B							
研究研修	生徒の主体的な学びを育てる授業の創造	総合的な学習の時間を通し、生徒が主体的に取り組む力を育てる。	1年生では広く郷土について触れ、2年生で学級発表、3年生で学校発表を行い、段階的に学習し発達段階に応じた計画によって主体性をはぐくむ。	C	行事に追われ、郷土学習に取り組む時間の確保が難しい。	B	B	コロナ禍で、フィールドワークでの研究や地域住民への聞き取りが制限される中、創意工夫して研究成果をまとめて発表をすることができた。	総合の発表会が年々よいものになってきている。もっと村民にも中高生の取り組みや考えを知ってもらうため、村内放送などで広めていくことも大切である。				
		さまざまな研修による教員の資質向上を図り、生徒のよりよい成長につなげる。	指導主事に依頼し研究授業をしたり、Eライブラリなど新たな学習ツールの研修をおこなったりする。	B	教科の特性があるため、研究授業を実施したあとの全体協議が持ちにくい。	B							
生徒指導	積極的な生徒指導の推進	規則正しい生活を心がけるよう呼びかける。	定期的に生活習慣アンケート等を行う。	C	生活習慣アンケートは実施できなかったが、休校明けにストレスチェックを行い生徒理解を図った。休校が長かったため生活リズムが乱れている生徒が多い。	B	B	休校があけ、続けて登校する習慣が付き、授業中眠たそうにしている生徒が少なくなった一方、夜遅くまでゲームをしている生徒もいる。	生活アンケートを実施し個別に指導をしたり、ネット依存、ゲーム依存について保護者への啓発運動も必要だと感じている。				
		いじめを許さない姿勢を強く持ち指導にあたる。	人権講話やその他の場面で積極的にいじめに関する話をしていく。	B	いじめアンケートでは自分や周りへのいじめ事象が各学年1~2件あった。今後も様子観察、ストレスチェック、二者面談を通じて早期発見、未然防止に努める。	B							
特別活動等	望ましい集団活動を通し、自己を生かす能力の育成	生徒会活動に主体的に取り組む力を育てる。	生徒会執行部だけでなく生徒全体が、取り組み、活動できる内容を導入する。	B	中高合同の各種行事をはじめ、中止・縮減となる中、新たな行事の創設や校則改正へ取り組みなどを行っている。	B	B	コロナウイルスの影響もあり、なかなか動けなかった校則改正に取り組んでいた。自分たちで何が大切かを考え、在校生に意見・提案をすることが出来た。	次年度、活動の自粛が解けた後は今までの活動だけでなく、高校との連携にリモートを導入するなど新たな形を模索していく。				
		学校生活の充実につながる学校行事を運営する。	生徒一人一人が、役割を持ち、自主的に活動し、ともに達成感を得られる行事を運営する。	C	今年度前半で多くの行事が中止となり、後半からも縮減となる中、生徒の活躍できる場を模索して。	B							
		心技体の成長につながる部活動を行う。	それぞれの部活動と個々の生徒が目標を設定し、目標へ向けた指導を充実させる。	C	今年度前半は多くの大会が中止になり、普段通りの活動を行うことができなかった。後半も感染症対策をしっかりとこなし、生徒の活動時間確保に努める。	B							
キャリア教育・進路指導	進路実現を見据えたキャリア教育の充実	将来の進路や職業などについての学習を積極的に進める。	道徳や学級会・総合的な学習の時間と連携し、進路選択・職業選択の学習をする。	C	新型コロナウイルス感染症により、職場体験学習を実施することができなかった。	B	B	職場体験学習は来年度もどのような状況になるかはまだ不明であるが、将来の仕事に向けた学習に取り組む方法を検討する必要がある。	○キャリア教育・進路指導 ・職場体験が出来なかったことは残念ではあるが、高校から教師を招聘し、何回か進路指導の授業を実施できたことは良かった。				

教育相談	自尊感情の(自己肯定感)の育成	生徒に寄り添い、悩みや不安を聞く体制をつくる。	スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカー等の関係者と連携した教育相談体制を整える。	B	スクールカウンセラーとは休校中もオンラインで情報交換を行った。スクールソーシャルワーカーとはケース会議を行い、家族を含めた支援を検討した。	B	B	支援を要する生徒・家庭について、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと情報交換し、検討することが出来た。スクールカウンセラーへの相談希望がなく距離を感じる。	教員、生徒、保護者がスクールカウンセラーに相談しやすい環境作りを整備する。引き続き、生徒の様子を見て共有していく。	○道徳教育 ・昨年に引き続き、授業者がそれぞれの専門分野で授業を行っていることは、今後も継続をお願いしたい。 ○人権教育 ・生徒はいろいろな大人から学んでいくものである。教師の人権講話のみならず、地域の方の人権講話にまで広げることが大切である。 ○特別支援教育 ・なかなか難しいことかもしれないが、「こだまの里」に勤務されている職員の講話を聞いたり、特別支援に類する高校から教職員を派遣してもらい、更に上の進路指導についてもお聞きする機会をもてると良いのではないかと考える。 ○安全教育 ・今年度は、新型コロナウイルス防止の安全教育に特化したことは、致し方ないし、逆に必要なことであったと思う。大人も子どもも徹底してマスク着用と手洗いの励行で感染を防ぐ習慣化が出来たことは大きな成果である。 ○家庭・地域連携等 ・「学校便り」、「学級通信」については、今年度のコロナ禍の状況では特に、保護者に学校及び学級の様子が伝えられるので、頑張ってもらいたい。 ○第1学年 ・転校生が立て続けにきたことで、集団作りを大切に学級経営がなされたと思う。担任を中心に教師集団全体でより良い方向に学級がまとまるように、今後も指導をよろしく願っていたい。 ○第2学年 ・顕著なリーダーシップがまだ見られないとのことだが、いよいよ最高学年になるので、成長を期待する。 ○第3学年 ・最高学年として、その学校の顔となる学年だけに、規範意識を高めながら、後輩の模範となるべく、教科学習や各種行事においてリーダーシップを発揮してもらいたい。兎にも角にも、修学旅行に行けて良かった。18人中9人が地元の小津川高校に進学を希望しているとのこと、安心して進路選択はそれぞれ、個々の自由であるが、ここ数年の状況を見ていただければ、地元の子が地元に残ってくれるのは嬉しい。
		生徒の精神面における健康を大切にす。	生徒の観察と教職員間の連携を大切に、未然防止・早期発見・支援・対応を心掛ける。	B	休み時間は生徒の様子を見に行くなど生徒の観察を積極的に実施し、気になることは記録や職朝で情報共有を行った。	B				
道徳教育	道徳教育の充実	道徳の時間やその他いろいろな場面で生徒の道徳性を育てる。	道徳の時間は教科書を中心教材として授業を行い、人権講話との連携を図る。	B	各学年で指導者のローテーションを組み複数で指導に当たり、生徒の言動に常に注意を払っている。	B	B	授業者のローテーションにより、それぞれの専門や得意分野で幅広い知識を生かして生徒に訴えかけるような授業が行われている。	道徳教育では生徒の実情に合った各学年の柱を決め、授業を組み立てていくことも必要である。人権教育では、引き続き学校全体で連携し、生徒の発言や行動に気を配る。また、教員の人権に対する意識を深める機会を設ける。	
		チームティーチング(TT)による計画的な道徳授業を推進する。	全学年、研究授業を行う。	C	休校や学校行事等の関係で1つの学年でしか研究授業が行えていない。	B				
人権教育	生命の尊重と人権意識の高揚を目指した確かな人権教育の推進	命を大切にす学習を行う。	他者の気持ちや意見を尊重する姿勢を身につける。	B	普段の学校生活の中で、全教員が連携し、生徒に対して適宜必要な声かけを行っている。	B	B	全教員が連携して声かけを行い、生徒のしんどさや気持ちを聞き出すことが出来ている。しかし、自尊感情が低かったり、他者を傷つける発言や行動をする生徒もいる。	教師の人権講話だけでなく、地域の方に講話していただいて、より多面的・多角的に物事を考えられるようになった。しかし、講話の内容に多少の偏りがあるため、年度によってばらつきがある。	
		人権を尊重する学習を大切にす。	毎月の人権講話等の感想文で、生徒の人権に対する意識を確認する。	B	感染症や雨量規制等による休校の関係で、人権講話を実施できなかった月がある。	B				
特別支援教育	みんなで関わる特別支援教育の推進	障害者問題やバリアフリーについて正しく理解できる学習を行う。	道徳の時間や人権講話を通して正しい知識や考え方を身につける。	C	全学年共通の特別支援教育に関する学習の機会を設けることができていない。	C	B	全体で共通の特別支援教育に関する学習の機会がなかったが、各学級で道徳の時間等において特別支援教育に関する学習を行った。	社会的要因や不測の事態においても例年どおり特別支援教育の周知徹底や各機関との連携を怠らぬよう工夫したい。	
		専門機関などとの連携を図り、特性や障害に応じた指導計画の作成や適切な指導を行う。	校外外との連携・連絡を密に取り全校体制で計画的に指導を行なう。	B	リモートによる教育相談の実施や村の特別支援コーディネーター会議に参加、校内においても連携・連絡を密に取っている。	B				
安全教育	保健安全教育の充実	生徒の健康を大切にす指導を行う。	保健安全教育への満足度が、生徒・保護者共に80パーセント以上を目指す。	B	休校中も保健便りを通して情報発信を積極的に行った。休校明けも心を大切にすほけんだよりや掲示物を作成し、ケアを行った。	B	B	ほけんだよりは20枚以上発行し、情報発信を積極的に行った。今年は感染症対策や心のケアに関する内容を取り上げた。	休日の部活動時のみの清掃箇所について、各学期ごとの大掃除や週に数回は清掃の計画で回数も増加している。来年度は防災・安全教育をできる形で実施したい。	
		健康診断や健康観察の結果から、指導が必要と思われる生徒に積極的に指導する。	健康診断の結果を分かりやすく伝え、受診を勧告する。規則正しい生活習慣を指導する。	B	新型コロナウイルス感染症により未実施の健康診断もある。実施した健康診断については早期に結果を配布して、必要に応じて受診を勧告した。	B				
	防災安全教育の充実	校内全般の整備・美化に努める。	毎日校内巡視を行い、危険箇所等がないかなどを確認する。	A	休み時間には全教員で巡視にまわったり、登下校時にも教員が安全指導を行ったりできている。	A		休み時間を含む校内巡視や登下校指導など十分に教師の目が行き届いている。休日の部活動時にしか清掃しない場所がある。		
		災害時の避難経路や正しい避難方法を指導する。	定期的に避難訓練を行い、常に自分の命は自分で守ることを意識させる。	B	コロナウイルスの関係で全学年を通しての避難訓練が行うことが出来なかった。1年生については避難経路の確認を行った。	B		新型コロナウイルス感染症に対する指導はおおむね行き届いたが、例年実施していたような防災・安全教育ができなかった。		
家庭・地域社会・他校種・関係機関等との連携	学校評価を活用した開かれた学校づくり	教育活動等の成果や取組について、適切に説明責任を果たし、その理解と協力を得る。	学校・学級・保健だよりの、月に一度の定期的な発行と内容の充実を努める。	B	三者懇談、授業参観、進路説明会等、感染症対策を行いながら実施している。学校ホームページを作成し、学校の情報を広く提供し、学校理解につなげている。	B	B	年度を通し、学校便り・学級通信等を定期的に発行できた。内容についても、保護者の来校が少ない中、できるだけ具体的な内容を心掛けた。	家庭・地域等との連携の重要性を感じる一年となった。今後もできるだけ多くの力を工夫しながら活用し、生徒の成長につなげたい。	
		小学校・高校との連携を充実させ、生徒の自尊・他尊・地尊を高める活動にする。	地域連携教育への満足度が、生徒・保護者共に80パーセント以上を目指す。	B	TT指導、各担当での打合せ、研究授業での交流、行事の計画等、できる範囲の活動を着実に実施している。	B				
第1学年	集団生活の基礎を養う	学級の一員として、仲間を大切にす、互いに協力する力を育てる。	いじめアンケートにおいて、いじめ認知件数を0件にする。	B	入学して半年が経ち、他人を思いやる発言や行動が出来ている生徒もいるが、他人を傷つけてしまふかもしれない発言をしている生徒もいる。いじめアンケートでは、いじめられていると答えた生徒はいなかった。	B	B	年度後半はクラスの全員で協力しようとする姿勢がよく見られた。まだ言葉遣いが荒い生徒がいる。	来年度は上級生となるので、1年生の模範となるよう日々の過ごし方を指導していく。	
		安心、安全な学級作り	生徒と信頼関係を築き、安心して過ごせる学級をつくる。	学期に一度は二者面談を行う。アンケートにおいて、学級を安心して過ごせると答えた生徒、安心して学校へ通わせられると答えた保護者を90%以上。	B	二者面談で個々に困っていることや悩んでいることを聞いた。言葉遣いや行動などが荒くなった場合は指導し、過ごしやすい環境作りをしている。		B		
第2学年	集団生活を通してリーダーシップを養う	学級の一員として、仲間を大切にす、互いに協力する力を育てる。	行事毎にアンケートを取り、引っ張っていったと答える生徒が80%以上を目指す。	B	体育大会の振り返りでは3年生が引っ張ってくれたなどを書いている生徒がいた。3年生に引っ張ってもらった反面、来年度の目標にもつながった。	B	B	学級内で問題が起こったとき、自分たちで解決法を模索している動きがあった。人数が少ないこともあるが、顕著なリーダーシップがまだ見られない。	来年度最上級生になるのに向けて、将来を見据えた進路選択や校内でのリーダーシップについて指導していく。	
		キャリア教育の充実	職場体験等を通して、将来について考える力を養う。	職場体験が自分の将来を考えるきっかけになったと答える生徒が80%以上を目指す。	B	職場体験が実施できず、教室でのキャリア教育や進路学習にとどまった。進路について具体的に考えている生徒がいる一方、将来や進学、就職についてまだ考えられていない生徒もいる。		B		
第3学年	学校のリーダーとして自ら考え行動する力を養う	学級の一員として、仲間を大切にす、互いに協力する力を育てる。	行事毎に振り返りを行い、自ら考え行動できたと答える生徒が80%以上を目指す。	B	コロナの影響で十分に練習・準備の時間がとれなかったが、例年以上にこの状況でどのような活動が出来るかを考える事が出来ていた。	B	B	修学旅行では、感染症対策を全員が徹底的に取り組むことができた。ルールを守りながら楽しく活動することが出来ていた。仲間の大切さを卒業まで継続的に伝えていく。	進路指導において学年・管理職と連携して情報の共有をこまめにし、生徒の納得のいく進路指導になるよう取り組んでいく。	
		進路保障	学期ごとに、二者懇談、三者懇談を行い生徒、保護者の思いを聞きながら、進路選択への助言を進める。	進路希望調査や進路学習の際にあらかじめ生徒の思いを把握しておく。	B	9月の実力テスト以降、毎月二者面談を実施している。生徒の進路に関する悩みや相談を聞き、生徒の進路実現に向けて共に計画を立てている。		B		コロナウイルスの影響により高校の体験入学は少なかったが、eオープンスクールという形で気軽に各高校の様子を見ることができた。また、放課後に二者懇談を実施し、進路に関する悩みや相談を聞く機会を設けることができた。

○自己評価・総合評価・・・4段階で記入 A:十分 B:概ね十分 C:やや改善を要する D:改善を要する